

心から躍る

造形遊び指導のポイント実践事例集

2014



●監修●
藤澤英昭
●編著●
日本造形教育研究会
東京支部
造形遊び研究部会

開隆堂

もくじ

●概論

■造形遊びは、造形教育の理念そのもの 3

■今こそ望まれる造形遊び 4

●低学年 どろどろ！しんぶんし



6

●低学年 けずって けずって



8

●中学年 広がれ！ ひらひらシート



10

●中学年 こえだランド



12

●中学年 布となかよくなろう



14

●高学年 鏡の中に うつして見つけて



16

●高学年 光の部屋へ



18

●監修者●

藤澤 英昭 (千葉大学教育学部 名誉教授)

●編著者●

日本造形教育研究会 東京支部 造形遊び研究部会

本間 基史 (新宿区立戸塚第二小学校 副校長)

石田 有希 (江戸川区立下小岩第二小学校)

河野 路 (小金井市立前原小学校)

杉山 聡 (板橋区立板橋第六小学校)

増田 三恵子 (大田区立立新井第一小学校)

室 恵理子 (杉並区立方南小学校)

望月 未歩 (品川区立後地小学校)

山野井 誠 (狛江市立狛江第五小学校)

造形遊びは、造形教育の理念そのもの

(千葉大学教育学部 名誉教授 藤澤英昭)

「造形遊び」は昭和 52 年の学習指導要領に「造形的な遊び」として登場したが、それは新しい柱の一つとして登場したのではない。絵、彫塑、工作、デザイン、鑑賞の各領域と同列にはない。

造形活動全般を考えたときにそれらをすべてに通底するような造形実験、造形行為自体を遊ぶ精神を確保しようとするところから出発している。

日々、急激に変化することが当たり前の社会にあって、一生涯を通じて不変の“もの”や“こと”、それをベースにする義務教育は完結的であることはできない。したがって、不断に学び続ける生涯学習社会の中の義務教育ということになる。そうするとキーワードは、“教え込む”から“自ら学ぶ”となる。当然、造形活動のたのしさに気づき、進んで主体的に表現し、鑑賞することがまず求められる。

絵画や彫刻は、大人が近代に棲み分けたジャンルに過ぎない。実際の作家も表現活動ではいろいろなジャンルを試みているので、このジャンル分けが便宜的なものであることは言うまでもない。このことはルネサンス期の作家からピカソ、さらには現代作家まで当然のことである。

ある時は表現の停滞に挫折し、また自分の思いと作品が離れていくと感じられることがある。しかし、かれらが自らに課した目標に果敢に向かうのはただ表現への意欲である。

つまり、造形教育は造形ジャンルにこだわらない、それらを支えているもっともっとベーシックなことは何か？と問うことから始まっていく。

いろいろな試行錯誤に挑む豊かな実験的精神、形、色、テクスチャなどの感覚が統合的で、未分化なまぶつかり合うような活動が必要だと考えたのである。

そのようなほとばしる感性の躍動が授業の場面で交流し合い、友人や周囲の大人を巻き込みながら、わが国の新しい造形文化をダイナミックに形成していく。

このように考えると「造形遊び」は、義務教育としての造形教育の成立の理念そのものであるといえる。

わが国の教育は諸外国から注目されており、「造形遊び」に関しては特に熱い視線が注がれている。造形教育を専攻する外国からの留学生はわが国の先進性を評価している。

もっともっと発信が必要な気がする。

今こそ望まれる造形遊び

(新宿区立戸塚第二小学校 副校長 本間基史)

今回の学習指導要領の改訂から「造形遊び」という言葉が正式に掲載された。それまでは「造形的な遊び」であった。表現(1)、表現(2)、鑑賞といった造形教育のジャンルというよりも、まさに造形教育の理念としてとらえたい。

イメージや感性という言葉が学習指導要領に取り上げられてきたことは、より一層子どもを主体においた、教育活動にシフトしていくべきであるという指針に思える。

イメージとは子どものイメージであり、「教師のイメージを押し付けるような授業ではいけませんよ」と言われながら、まだまだ〇〇方式の作品や、二重構造の題材(子どもが次にやることがイメージできないような、作業的前段階をふまないといけないような授業構造をもったもの)が見受けられる。

図画工作科だけではなく、どの教科でも問題解決型の授業が大切だといわれている中、図画工作科で教え込むような授業を実施してしまっでは元も子もない。学習指導要領解説においても「表したいものの形や順序などを細かく決めすぎると、児童の発想や構想の能力、創造的な技能などが発揮されない場合があるので配慮する」「児童の意欲が高まり、継続するような指導を行う。活動を進めながら表したいことを見つけていくことが多いので、表したいことの変化などには柔軟に対応する必要がある」と表現(1)の配慮事項として明記されている。



「造形遊び」とは材料をきっかけにしたまさに問題解決型の授業である。

「造形遊び」は材料を与えることをきっかけとして始める。子どもは材料に積極的にかわっていくことを通して、感覚を十分に働かせ、納得するまで作り直したり、行きつ戻りつしながら表したりする(もちろんそのような過程を教師が設定しなければならない)。「造形遊び」はゴールが決められてはいない。ということは、子どもがこういうものをつくりたいという考えをもつことが重要なのである。

教師に言われた通りのものをなぞってつくっていくのではなく、自分で材料に触れ、活動していく中でイメージを確立していくこと、自分でやりたいことを見つけるということは、自己決定力、自己選択力を培うということに他ならない。学習指導要領で「生きる力」が謳われているが、図画工作科において「生きる力」とは、上手につくる技術だけではない。自分で考え決められるということが、より大切なことになってくるのである。

このように考えると「造形遊び」の理想の授業像が見えてこないだろうか。

〔共通事項〕にどう出合わせるか、形・色・イメージで先行しない、材料に触れることを通して触感や質感、においや重さ、固さや温度など自分で感じる事が大事である。具体的には授業をデザインしていく中で、ただ材料を与えるだけではなく、ねらいがかかわってくる。自由と放任とは違う。活動があって、学びがない活動になってはいけない。

ねらいにそった授業にするためには、教師の与える条件を十分に吟味しなければならない。

これは全部オープンで自由ではないということである。条件の設定としては、材料の種類、量、使用する道具、補助材料、接合・接着材料、空



間(教室の広さ、一人あたりのスペース)、場所、時間、人数(一人でもグループでも)などが考えられる。また、配慮事項にもあるように指示的になりすぎて児童の発想を狭めたり、具体的な作品をつくるような意識を強くもたせたりすることには十分注意する必要がある。

もちろん、活動場所の範囲や安全に配慮することは言うまでもない。

このような「造形遊び」を低学年から積み重ねていくと、いろいろな材料体験を重ね、造形活動をたのしみ、主体的に表現する子どもが育っていくのではないだろうか。

その反面、図工専科ではない学級担任が「造形遊び」を実施するにあたってのハードルの高さについての話も耳にする。

「そんなに大量の材料を準備できない」「体育館や校庭を使用しての造形活動はダイナミックでやってみたいが、時間や場所の設定が難しい」「造形遊びの評価がわからない」

材料に関しては、普段の授業で使う材料や学校にあるもの、安価でも大量に使えるものなど、地域や学校の特性を生かしていくことも考えられる。場所に関しては、校庭や体育館など広い場所でもなくてもよいわけで、ねらいと材料を吟味すれば、机上の造形遊びでも目標を達成することができる。評価に関しては、「造形遊び」

に限らず、ねらいの裏返しであり、授業のねらいから評価を考えるようにする。例えば、題材のねらいが「自分の気に入った色をつくったり、色水を垂らしたり飛ばしたりした色水のあとの形や色から思いついた活動をたのしむ」であれば、自分の気に入った色をつくる活動を活発にしていたのか、色水を垂らしたり、飛ばしたりしたあとの形や色に触発され、さらに思いついた活動を展開していたのかという視点で評価をしていくことになる。

「造形遊び」の鑑賞に関しては、まさに表現と鑑賞が一体となって繰り広げられている。材料を操作しながら、材料そのものを鑑賞し、場にかかわっては、自分の活動を振り返って鑑賞している。

鑑賞して、活動を語らせること、言語活動が題材の目的とならないようにする注意も必要である。

「造形遊び」が造形教育成立の理念そのものであるとするならば、表現(2)においても同じスタンスで臨んでいくことができれば、より生涯学習において「生きる力」につながる図画工作科の教科の有効性につながっていくだろう。そして主体的な児童の活動が保障されることになる。

今回の実践事例は東京都で中心となって活躍している図工専科の教諭が実際に日々の授業で実践したものである。

特に導入時の言葉かけは「造形遊び」において重要なポイントとなる。具体的な作品をつくらせるような意識をもたせず、意欲的に取り組めるような声かけは参考になるだろう。この実践例集をもとに、それぞれの学校の子どもの実態に合わせ、たのしい「造形遊び」が各校で繰り広げられることを望んでやまない。

■ 題材の目標（ねらい）

水や洗濯糊を加える前と加えた後で変化する新聞紙の質感や感触をたのしみ、手で触った感覚や気持ちなどをもとに表したいことを思いつく。

■ 題材の内容

身近な新聞紙の質感や感触の変容を体験し、表す題材である。視覚だけでなく、触覚や聴覚など、体の諸感覚を働かせながら自分の感覚で材料とかかわる活動である。

〔共通事項〕との関連

手で触るなどしながら自分の感覚で材料の形や色をとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／水彩用具一式

教師／新聞紙、洗濯糊、養生シート、小皿、バケツ、板段ボールなど

● 場の設定

- ・机に養生シートを敷いておく。小皿の中で新聞紙の感触をたのしむだけでなく、机の上に広げたり伸ばしたりして、さまざまに試せるようにする。
- ・気に入った形を残せるように板段ボールを用意する。材料の重みや水分に耐えられる厚さと、表したいことに合うさまざまな大きさの板段ボールを用意する。

● 導入のしかた

体の諸感覚を通して新聞紙の材質感や感触に関心をもてるような導入を心がける。「今日は新聞紙を使います。広げてみよう」水や洗濯糊を加える前の新聞紙、その大きさや手触り、温かさを味わう時間をとる。「新聞紙を水で濡らすと…」大きな新聞紙があっという間に小さくなる様子を見せる。「さらに、洗濯糊を加えると…」新聞紙に糊を加えた後は、混ぜ合わせる音を聞かせるなど、感触のおもしろさや気持ちよさを視覚だけでなく聴覚でも味わえるようにする。

■ 評価の観点

- 関／水や洗濯糊を加える前と加えた後で変化する新聞紙の質感や感触をたのしむ。
- 発／材料を手で触った感覚や気持ちなどをもとに表したいことを思いつく。
- 創／手で触るなど体の感覚を働かせながら材料をとらえ、表し方を工夫する。
- 鑑／手で触るなどして材料をたのしく味わい、自分や友だちの活動のよさやおもしろさに気づく。

安全指導

材料を直接手で触り、味わうことが大切な活動だが、手指に切り傷などがある場合は、ビニル手袋を用意するなど配慮する。

後片づけ

- ・手についた新聞紙などを洗うときは、直接水道に流すと排水管が詰まってしまう。水を張ったバケツなどを用意し、その中で洗うようにさせる。後で、バケツの中の新聞紙を漉して処分する。
- ・新聞紙を乾燥させる場所と時間を確保する。山のように盛り上げた新聞紙は乾燥するのに時間がかかる。材料が乾きやすい季節に行う。

◎題材の発展

《ぐちゃぐちゃ・いろいろねんど》

新聞紙をどろどろにしながら色も加え、感触とともに色の変化をたのしんでつくる。

《かみねんどコレクション》

新聞紙の他にトイレットペーパーやお花紙、画用紙、和紙などさまざまな紙で試し、同じ紙でも違う質感の紙粘土をつくり、並べたり積んだりする。

■ 授業の流れ・展開例

導入 10～15分／提案1＝「1枚の新聞紙を広げてみよう。新聞紙を水で濡らすと…さらに、洗濯糊を入れると…」



新聞紙を広げると、子どもは自然に体に巻き付け、マントにしたりドレスにしたりする。新聞紙の大きさを体で感じられるような時間を設ける。
新聞紙を濡らす様子を見せると、今まで実感していた大きな新聞紙があっという間に小さな塊になるので、その変化に驚く。さらに糊を加え、手で混ぜ合わせる音をみんなで共有し、視覚だけでなく聴覚も働かせて活動できるようにする。

展開① 20～40分／提案2＝「新聞紙を水で濡らして、糊を加えてみよう」



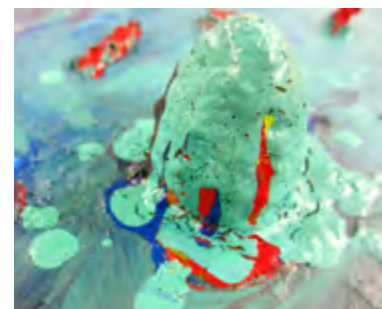
水気を絞った新聞紙を軽く開くと、「生乾きの洗濯物みたい」繊維をほぐすようにちぎり、糊を加えてこねこねと混ぜ合わせる。
「うわ～！ 気持ち悪い！」うれしそうに混ぜ合せているうちに、さまざまなことを見つけたり試したりする。友だちの新聞紙を見て、「加える糊の量で新聞紙の感じが違うね」と気づく。机に広げたどろどろの新聞紙を引っかくとおもしろい線が描けることを見つけ、試している。

展開② 15～40分／提案3＝「残しておきたい形は板段ボールの上につくろう」



展開①を十分にたのしんだ子どもから、「何かつくりたい！」とリクエストがあった場合、残しておきたい形は板段ボールの上につくることを提案する。長時間、展開①をたのしむ子どももいる。そこで得ている学びは何か、次の展開へどのように発展するか、共感的に見守る。粘土状の新聞紙を並べながらイメージを広げたり、線の痕跡から、さまざまに試しながら立体に表したりしている。

展開③ 35～70分／提案4＝「乾いた新聞紙はどんな感じかな。ここにほしい色はどんな色かな」



「新聞紙がカチカチにかたまった！」乾燥後の新聞紙の材質感や感触をたのしむ時間を確保する。新聞紙を山のように盛ったものは生乾きで、そこに指で穴を開けている子どももいた。乾燥した新聞紙の感じに触発されイメージを広げたり、新聞紙色の痕跡に新たに色を加えて表したいことを確かにしたり、さまざまな発展が見られた。右側の写真は、展開①の右写真の子どもの作品。どろどろ新聞紙を指で引っかけて痕跡をたのしんだ時間が、表現に立ち現れたことが伝わる。

振り返り 10分～15分／提案5＝「みんなで見合おう」

■ 題材の目標（ねらい）

土粘土の塊を削って粉にして、その粉を集めたり、線を描いたりする活動をたのしむ。

■ 題材の内容

本題材では、どの図工室にもある乾燥して使用しなくなった土粘土の塊を削り、粉にする行為から活動を始めていく。粉というと可塑性もなく扱いづらい印象もあるが、広い画面の上に粉をまいた場合、指で線が引け、その上に粉をかければ簡単に画面をリセットすることができる。つまり、体全体で思い思いに操作し、つくり広げていくことができる材料の一つだと言えるだろう。本題材は粘土の粉を積み上げるような立体的な変化ではなく、平面上で粉を散らし、集め、子どもの動きが机の上に軌跡として残っていく。その中で自分のやりたいことを試し、何度もつくりかえながら、自分がやりたいことを見つけていけるような活動になることを期待したい。

【共通事項】との関連

体全体の感覚や土粘土を削る活動を通して、形や色などをとらえ、自分のやりたいことのイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／雑巾、汚れてもよい服装

教師／土粘土が固まったもの（色違いを含め人数分）、ぼかし網、プラスチック段ボール（黒）、ボウル、容器、ポリ袋、木づち、雑巾、バケツ、プリンカップ

● 場の設定

机には直接土粘土の塊を置けるように、また、土粘土の色がしっかり見えるように黒のプラスチック段ボール（または黒いラシャ紙）を設置しておく。途中で手を拭けるよう雑巾を濡らしておく。

● 導入のしかた

活動そのものをたのしみ、自分のやりたいことが見つけられるように材料とふれあう時間を十分にとる。「削った粉でどんなことができそうか試してみよう」など、活動を子どもに委ねる投げかけでスタートしたい。

■ 評価の観点

関／土粘土の塊の感触を味わったり、変化する様子をたのしんだりする。

発／土粘土の色や感触、そこに残った形からイメージをふくらませて、自分が表現したいものを思いつく。

創／土粘土の粉を集めたり、まいたり、指でかいたりしながら表現方法を試し、いろいろな形を工夫する。

鑑／自分や友だちの活動のよさやおもしろさを味わう。

安全指導

土粘土の塊は石のような硬さのため、投げたり友だちを叩いたりしないよう注意する必要がある。また、誤って目や口に入った場合は、すぐに流水できれいにするなど事前にルールを確認しておきたい。削るための網は手渡す前にチェックをし、破れたり、ほつれたりしていないものを用意する。また、粉が飛ぶので気管支が弱い子どもがいる場合はマスクを着用する。

後片づけ

本題材で使用する材料は固まって使わなくなった土粘土のみである。したがって、全部集めて水を混ぜると簡単に粘土として再利用することができる。粉の処理も養生シートを事前に敷いておけば、片づけも簡単に終了する。また、手を洗う前には水をためたバケツで一度手を洗ってから、蛇口の水で洗うよう心がければ、排水口が詰まることもない。

◎ 題材の発展

本題材は低学年題材のため、材料の中に水は扱っていないが、中学年以上の学年で行う場合は、水も取り入れ、状態や触り心地の変化を加え、活動の幅を広げることできる。ただ、その場合は、材料自体の性質が大きく変わることには注意しなければならない。可塑性が出ることで感触も表現する形も変化する。この活動で何を一番大切にするかを授業者が決め、それに合わせて評価もつくり直す必要がある。

■ 授業の流れ・展開例

導入 10分／提案1＝材料との出会い。「今日はこの材料を使って活動するよ。…ところでこれは何だろう？」



机には黒いプラスチック段ボール、またはラシャ紙を設置しておき、さまざまな形や色の土粘土を置いておく。

土粘土とかかわる時間をしっかり確保し、そこで出る子どもの気づきを大切に
する。
「石かな？」「においはしない」
「砂の塊だよ」「ザラザラだね」

活動のめあて、注意点などを確認する。

展開① 20分／提案2＝材料に働きかける。「この材料を網で削ってみよう。」



できた粉を集めたり机の上に広げたりしながらできる活動を始める。

「粉が出てきたぞ！」
「さらさらしてる」
「たくさん集めよう」
「指で線が引けるよ」
「色が違うよ」

粉を集めたい子どものために、プリンカップなどの容器を用意しておく。

展開② 40分／提案3＝自分のやりたいことを試す。「できた粉でできることを見つけてみよう！」



つくった軌跡を見ながらイメージを広げている様子を評価する。
「手の上に粉をかけたら形が残ったよ」
「グループで合体させて大きな形にしよう！」
一つの机に4～5人で活動するので、自然に友だちの活動とつながっていくことも考えられる。同時に鑑賞も行われている。
「〇〇くんの形、おもしろいな」
「みんなのも見てみようよ」
活動の中で変化していく様子を、デジタルカメラで記録する。

振り返り 20分／提案4＝活動を振り返る。「みんなの活動のあとを見てみよう！」



自分の活動を振り返ったり、友だちの活動のよさやおもしろさに気づいたりする。
「みんなでつくったから大きい形ができたよ」
「何度も形が変わっておもしろかったね」



机の上の軌跡だけでなく、削った土粘土の形に関心をもつ子どももいる。さまざまな気づきを一つ一つ受け止めながら、この時間を振り返りたい。

（杉山 聡）

■ 題材の目標（ねらい）

大きなビニル（養生シート：以下、「ひらひらシート」）の感触や操作をたのしみ、自分の選んだ場所の特徴からしてみたい活動を思いつく。

■ 題材の内容

体育館内にランダムに張られたビニルひもや肋木、壁などを利用して、自分の体より大きなひらひらシートを吊るしたり、張ったりしながら思いついた活動をする。ひらひらシートは、必要なだけ自分で切って持っていけるようにする。壁やひらひらシートの接着には養生テープを使用する。

〔共通事項〕との関連

ひらひらシートと場に働きかける活動を通して、形や色、組み合わせなどの感じをとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／はさみ
教師／養生シート（180cm × 100m ロール巻）3本（児童 30 人程度の場合）、養生テープ（児童数分）、お盆（はさみ保管用）、ビニルひも、踏み台

● 場の設定

活動のきっかけとなるよう、体育館内の紅白幕用のフックやバドミントンなどのポールを利用してビニルひもをランダムに張り、ひらひらシートを吊るしたり、張ったりできるようにしておく。また、窓や扉などの開口部を開けておくと、風を感じながら活動ができるので、そこから表現が発展することが期待できる。

ひらひらシートはロール巻きのものを使用し、そのままギャラリーからひもで吊るして、自分の好きな量を切って持っていけるようにしておく（トイレットペーパーのロールホルダー式）。

● 導入のしかた

「今日はこんな材料を使ってみるよ」と、期待をもたせるようにゆっくりとひらひらシートを広げ、材料に出合わせる。まずは、ひらひらシートを子どもに手渡し、振ったり丸めたりしながら、その大きさや軽さなどを体全体で感じる時間を取る。その後「この広い

体育館の中で、この材料を使って何ができるかな？ はさみを使って切ってもいいし、テープを使ってつなげてもいいよ」と、活動の投げかけをする。

■ 評価の観点

関／ひらひらシートの感触やその操作をたのしむ。

発／ひらひらシートの特徴を生かして場所を見つけ、してみたい活動を思いつく。

創／選んだ場所の特徴を生かして、ひらひらシートでの表し方を工夫する。

鑑／自分や友だちの活動のよさや変化させた場のおもしろさを味わう。

安全指導

- ・ビニルは首から上には巻きつけない。
- ・ビニル上はすべるので、上に乗る場合は気をつける。絶対に走らないよう指導する。
- ・はさみはお盆に入れて保管する。

後片づけ

活動の様子は子どもたちも含めた写真を撮っておく。活動の結果は写真で後から振り返ることを伝え、片づけに入る。

ひらひらシートはすべてロープから外し、ポリ袋へ入れる。子どもたちは「壊す」活動も大好きなので、片づけは短時間で終わる。

集めたひらひらシートは後日、他の授業で使用する。

◎題材の発展

本題材は体育館での活動だが、もっとダイレクトに風や光が感じられる屋外での活動も考えられる。遊具や樹木などを利用しながら活動してもよい。

養生シートはその透過性も美しいし、わずかな風にもなびくので、外での活動では体育館内以上に風を感じ、太陽の光を感じながら、風や光を利用したさまざまな活動に発展することが期待できる。

■ 授業の流れ・展開例

導入 15 分／提案 1 = 「ひらひらシートを体全体で感じよう」



体育館内にはあらかじめビニルひもをランダムに張っておく。
追加のひらひらシートはひもで吊るしておき、トイレットペーパーのように必要なだけ切って持っていけるようにしておく。



導入ではある程度の大きさに切ったひらひらシートを子どもに手渡し、材料を体感させる。
「大きいのに軽いね！」
「床で揺らすと波みたいだったよ」

展開① 65 分／提案 2 = 「ひらひらシートを使って、何をしよう？」



ドアのそばでひらひらシートをかけて活動を始めた子どもたち。
「風が吹くとふわっとするね！」「風をつかまよう！」と、ここから活動が一気に進む。
場の特徴を生かして活動している様子から創造的な技能を評価する。



ひもからひもへひらひらシートをかけてみよう活動を始めた子どもたち。
「屋根みたいにしたいな」



「空気が逃げないように、テープでしっかりとめなくちゃ」
風の具合でひらひらシートが膨らんだり萎んだりする。
「風船みたい！」
「音がすごいね」
「中に入ると不思議な感じがするよ」



養生テープを星に見立てて上部に貼り、ブラネタリウムの完成。

「寝ころがって星を見られるように絨毯を敷いたよ」
「枕もつくろう」



ひらひらシートの下にもぐり込んだことで、その透過性の美しさに気づいた。
「光が透けて、きれいに見えるよ」
「テープが何かの模様に見えるね」
材料から表し方を考えて活動している様子から発想・構想の能力を評価する。

振り返り 10 分／提案 3 = 「みんなの活動を振り返ろう」



振り返りの時間には、友だちの活動も見て歩くように声をかける。

「中に入ると秘密基地みたいだね」
「透けて向こうが見えた感じがきれいだったよ！」

ひらひらシートはすべて外し、ポリ袋に入れて片づける。

（望月 未歩）

■ 題材の目標（ねらい）

たくさんの小枝をもとに、どんなことができるか、たのしく考えたり、組み方やつなぎ方などを工夫したりして思いついた活動をする。

■ 題材の内容

30～40cm程度の細い小枝を組んだり積んだり、マスキングテープを使ってつなげたりする。十分な量のある材料をもとに、つくりたい形を思いついたり、活動のおもしろさを見つけたりしながら、自分らしい活動を展開させていく。

【共通事項】との関連

小枝を重ねたり、組み合わせたりする活動を通して、形や色などの感じをとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／（自分で用意できれば小枝を拾っておく）

教師／1クラス30人あたり、段ボール箱5箱分程の小枝（30～40cmに切ったもの。枝が分かれしたり、芽がついたものも含む）、マスキングテープ（9mm幅）

● 場の設定

図工室の机を周囲に寄せ、床面を広く取って、その中央に1㎡程の大きさのシートを敷き、材料の小枝を山にして積んだ。床での活動だけでなく、机の上につくったり、椅子に固定したり、空中のワイヤーから吊るしたりする活動も予測されたので、子どもが自ら気づき、選択できるように、手の届く範囲にそれらを設置した。

● 導入のしかた

最初に一人一人にマスキングテープを手渡した。早速「何をするんだろう！」と声があがる。「今日の材料はね…」と言って、小枝を詰めておいた段ボール箱を振った。ザッザッという音に関心が集まる。教室の中央に敷いたシートの上に5箱を一気に開け、「この枝分かればおもしろいね、太めのもあるよ」と材料を提示しながらその違いにも注目させた。つないだり、束ねたり、それを立たせてみたりしながら、マスキングテープでの接着法を目の前で実際にやって見せ、「この小枝でどんなことができるかな？ 自分の場所を決

めて始めよう！」と声をかけた。

■ 評価の観点

関／枝を選んだり、組んだり、束ねたりする活動をたのしむ。

発／枝を組んだり、束ねたり、置いてみたりしながら、してみたい活動を思いつく。

創／材料の特徴を生かしながら、つなぎ方や組み合わせ方を工夫する。

鑑／枝の形や組み合わせたときの感じなど自分や友だちの活動のよさやおもしろさに気づき、味わう。

安全指導

枝は切り口が鋭利なので、扱いに注意するよう声をかける。中学年の子どもが安全に扱えるよう、枝の長さに留意する。椅子の上など高い所に登る際も注意する。

後片づけ

組み合わせた枝は、置きたい場所に移動して鑑賞した。使わなかった枝は、シートの上に集めて授業を終える。

後日、飾っていたものや使わなかった枝からマスキングテープを剥がし、また箱の中へ収納する。マスキングテープは手でちぎることができ、比較的容易に剥がせるので、児童数名に手伝ってもらえば段ボール5箱分20分程度で片づけられる。

◎題材の発展

高学年で、大量の板材（90cmに切った胴縁700本程度）を扱ってビニルテープで組んでいく題材を行った。この時は校庭で活動をした。子どもたちは場所の特徴も取り込みながら、それぞれダイナミックな活動を展開させていた。



■ 授業の流れ・展開例

導入 10分／「小枝がたくさんあるね！どんなことができるかな？」



「大量だ！」十分な材料が保障されていることで、慌てず、自分のペースで選ぶことができる。「太めの枝がいいな」「芽がついているのもあるね」自分のスペースに戻って再度じっくりと材料に向き合っている。写真を撮るなどしながら、材料にかかわる子どもの姿を見取る。

展開 65分／「つないだり、組んだり、思いついたことを試してみよう！」



「高く立ててみようかな」自立する方法や、丈夫を試しながらつくっている。

「ほんとうの木みたいな枝だけ集めて林みたいにしたいな。まず花束みたいに巻いて、それからくっつけるときれいな！」自分らしい方法を見つけたり、立ち現れつつある形の美しさを感じて、配置を考えたりしている。



「光の場所に置いたら、影の形が面白い」そっと場所を動かして作品の見え方の違いを教えてくれる。



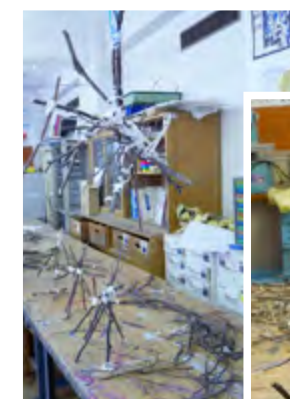
「ことりの秘密基地だよ！」餌場や屋根やハシゴなど、つくりながら思いを広げ、また次々とつくる。材料のよさや特徴を自分に引き寄せて、さまざまな方法を試しながら形に表している。

どんなことをしているのか聞いたり、一緒に見たりしながら、作品のよさを伝えたり支援したりした。

振り返り 15分／「見てみよう！たのしいことやすてきな形を見つけたよ」



「キンコンカンコン♪ 枝の木琴」友だちが口ずさみながら叩いてくれる。



「このバランスがすごいね！ほくも1本挿してみてもいい？」

「みんながいろんなことをしていたのいいな！図工室が小枝の国になったみたい」

（増田 三恵子）

■ 題材の目標（ねらい）

布のよさや特徴を全身で感じ取り、そこから造形的な活動を思いつく。

■ 題材の内容

伸縮性があり、軽量で子どもの体を包み込めるくらいの長い布に、体全体でかかわり、材料のよさや特徴を見つけ、そこから発想を広げていく題材である。布に包まれる、上下に揺らす、高く舞い上げる、下に敷いて寝転ぶ、風をつかまえるなど、体と布の自然なかかわり合いの中からさまざまなことをたのしむ活動である。

〔共通事項〕との関連

布に体全体でかかわる活動を通して、布の形や色、質感などをとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／動きやすい服装（体育着など）

教師／サテン地の白い布（伸縮性◎、透過性○、軽量感◎）

① 1.5m の長さを人数分

② 3～6m の長さを 10 枚程度／はさみ×1（必要に応じて切ることを想定して）

● 場の設定

子どもの体が布と積極的にかかわり、さまざまな行為を保障できる広い空間（遊具などは使用しない）。体育館などでも可能であるが、芝生や人工芝など地面の固さによっても活動は変化する。

● 導入のしかた

「あなたたちの体と大きな布だけで、どんなことができますか？ 今日たくさん布となかよくなりましょう」と伝える。大切なのは、子どもの体が道具であり、作品にもなることを理解させること。また、場所についても、

「遊具は使いません。たくさん、あなたたちの体が布と触れ合ってください」と活動のルールについて述べる。

■ 評価の観点

関／友だちと力を合わせて活動し、布の感触やその操作をたのしむ。

発／布や場所の特徴をもとに、してみたい活動を思いつく。

創／布と自分の体を使った表し方を工夫する。

鑑／布のよさや特徴を味わい、自分や友だちの活動のよさやおもしろさなどを感じ取る。

安全指導

- ・大きな布であるため、首などに強く巻いたり、縛ったりさせないように事前に伝えておく。
- ・遊具は使用させない（体と布がたくさん触れ合えるように、場に一定のルールをもつ）。
- ・はさみについては、教師が必要に応じて使用する（児童は使用しない）。

後片づけ

- ・広い場所で活動する際は、集合の合図、時間は事前に子どもと決めておく。
- ・布は汚れたら洗濯をして、プラスチックケースなどに保管し、繰り返し使用できるようにしておく。

◎題材の発展

高学年で取り組む場合、スポットライトなど光源を用意すると、光や影を意識するような姿も予想される。布をスクリーンにして影絵をする、形づくった様子に陰影のよさを見つけるなど、半透過性の材料の特徴に気づく様子も考慮したい。

■ 授業の流れ・展開例

導入 15 分／提案 1＝「まずは場所を全身で感じてみよう」



「風が気持ちいい！」「寝転ぶと空が青いよ！」「風が気持ちいい！」「寝転ぶと空が青いよ！」など、活動場所に親しみ、子どもの気持ちがりラックスすることをねらいとした。
校庭の広い空間を設定した。ジャングルジムや鉄棒などの遊具は、使わないように伝えた。制限をすることで、子どもの体と布がたくさん触れ合うことをねらいにする。
心と体が解放され、友だちや布の存在を全身で感じられる場を保障したい。

展開① 15～45 分／提案 2＝

「あなたたちの体と布だけでどんなことができそうかな？今日は布とたくさん、なかよくなろう！」



「軽くて気持ちいい」「サラサラしている！」「風にフワーっとなびいていくよ」など、材料を手にした子どもたちは、直感的に材料のよさをとらえ始めた。子どものつぶやきや材料とのかかわりに共感していく。
グループは子どもの実態に応じてさまざまに考えられる。特定のグループを設定するのではなく、流動的に設定したい。実態を考慮し、子どもどうしの自然なかかわり合いができるようにする。

展開② 45～60 分／提案 3＝「さらにどんなことができそうか、見つけてみよう！」



「みんなで布に包まれるとシュウマイのようだよ」「3人でせーの！」「でんぐり返しをすると、布が回転するよ！」「みんなで引っ張り合ってトランポリンにしたよ！友だちが一人飛び込んだよ！」など、活動がさらに発展していく。布のよさや特徴を体で感じ、表し方を工夫している姿（創造的な技能）である。活動に共感しながら、デジタルカメラで子どもの活動を記録し、創造的な活動を評価していく。

振り返り 15 分／提案 4＝「発表し合おう！」



「友だちと一緒に布をもってくるくる回ると、忍者のようだった」「大勢で丸くなると、まるで花びらの形になった」「風をつかまえると自分が空を飛んでいるようだった」など、たくさんの発言が聞こえた。
子どもが自分自身の体で、材料のよさを感じられたからこそ、振り返りも充実した。
後片づけは、まわりの人と協力して、布を小さくたたませる。小さくたたむ活動もたのしんでいた。

（山野井 誠）

■ 題材の目標（ねらい）

試したり見つけたりしながら、自分らしい造形的な表現の追求と発見をする活動である。ミラーシートの特徴を生かして、空間を考えながら、画用紙や厚紙で思いついた活動をする。

■ 題材の内容

画用紙や白ボール紙を思いのままにはさみで切り、切った材料をつなげたり、折ったり、組み合わせたりして形をつくる。つくったものをミラーシートの上に並べ、映し出される空間を意識しながらたのしむ活動である。

【共通事項】との関連

紙を折ったり、つないだりしてミラーシートに置き、映った形や奥行きなどの造形的な特徴をとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／はさみ、カッターナイフ、ホチキス
教師／画用紙、白ボール紙、ミラーシート、カッターマット

● 場の設定

ミラー状の画用紙を使った個人の活動とすることも可能だが、できれば図工室の机や、児童机や長机をつなげて広いスペースを確保し、大きなミラーシートの上で活動したい。友だちと自然に互いの活動を見合ったり、つながったりすることもできる場所を設定する。

● 導入のしかた

「今日はこのミラーシートの上で活動するよ」鏡面に紙の形が映って見え方が変化する場面の導入が重要である。小さな紙帯を折ったものや単純につないだ形を、全員を集めて注目させ、そっと置いてみせると、やってみたいという期待感が膨らむ。

はじめは紙帯一本、小さな大きさの画用紙などを与え、いろいろ試す時間を設定してから「ミラーに映った形のおもしろさを考えながら、紙を切ったり、折ったり、つないだりして、いろいろなことを試してみてください」と提案し、次にいろいろな大きさや硬さの紙を出して活動の幅を広げるようにする。

■ 評価の観点

関／画用紙や白ボール紙などの材料やミラーシートに映る空間に関心をもつ。

発／紙をミラーシートに置いて映った形などをもとに、造形的な活動を思いつく。

創／ミラーシートの効果を考えながら、紙を折ったり、切ったり、つないだりして材料の使い方や置き方を工夫する。

鑑／映った形のよさやおもしろさ、自分や友だちの活動のよさやおもしろさなどを感じ取る。

安全指導

ミラーシートの上にいろいろなものがあると映った形をとらえにくいので、はさみやホチキスは別に置いておくスペースがあるとよい。カッターナイフを使う場合もミラーシートの上ではなく、カッターマットを使うスペースを確保したい。

後片づけ

画用紙や白ボール紙は、ホチキスの芯をはずしてリサイクルする。また、使えそうな大きさのものは、紙版画や工作のときに使えるようにストックしておく。

◎題材の発展

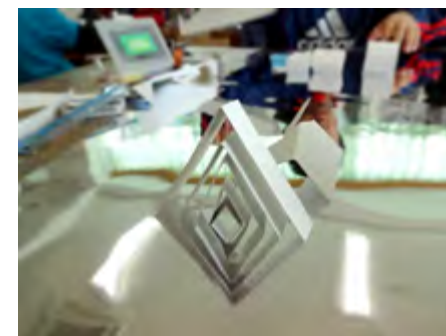
ミラーシートが手に入らない場合、白ボール紙だけでも空間や場所を意識した活動に展開できる。展覧会や作品展の台紙の切り落としなどが大量にあれば、まず一人に1枚（八つ切り大くらいのもの）を手渡し、思いつくままにいくつかのパーツに切り分ける。そのパーツをつないだり、組み合わせたりして、空間をつくっていく活動である。友だちとつながったり、紙の大きさによっては自分の背丈よりも大きな立体にも展開できる。

この場合は、机の上に白い模造紙などを敷いておく



■ 授業の流れ・展開例

導入 15分／提案1＝「今日はミラーシートの上で活動するよ」



2cm幅の紙帯を1本渡し、切ったり折ったりしてミラーシートの上に形をつくることを提案する。

「まずは置いてみよう…」
「形が2倍になるよ!」
「見て見て! ダイヤが浮いているみたい」

いろいろな置き方を試したり、形を工夫したりしている様子をとらえる。

展開 60分／提案2＝「紙を切ったり、折ったり、つないだりして、ミラーシートに映るおもしろい形を見つけよう!」



紙帯以外にも長方形の画用紙や白ボール紙を用意し、活動の幅が広がるようにする。
つくった形とミラーシートに映った形を見ながらイメージを広げ、試行錯誤している様子を評価する。
(写真や動画なども活用する)

「〇〇の形に見える…」
「紙の裏側が映って見えるね」
「並べて友だちとつなげよう」
「不思議な世界ができてきたよ」



映り込んだ形を見ながらの活動になるので、つくった形以外のものはミラーシートの上に置かないようにする。
大きなシートの上で3～4人で活動するので、自然に友だちのつくった形が目に入り、つながっていくことも考えられる。
同時に鑑賞も行われている。

「〇〇ちゃんの形、おもしろいね」
「みんなでつなげてみようよ」

振り返り 15分／提案3＝みんなの活動のあとを見てみよう!



「自分が思いつかないようなことを友だちがしていた」
「映った形がおもしろい」
「鏡の中の世界に入り込んだみたいでたのしかった!」

(室 恵理子)

■ 題材の目標（ねらい）

光の特徴をとらえ、場所にかかわりながらさまざまな表し方を試したり、見つけたり、考えたり、工夫して活動する。

■ 題材の内容

光を出す、通す、色を変化させる、遮るなど、光と材料の特徴を試しながら見つけていく。身近な場所に進んでかかわり合い、光の表し方を工夫したり、周囲の様子を考え合わせたりしながらつくる。

〔共通事項〕との関連

自分の感覚や活動を通して、光の特徴や、材料との組み合わせによる変化などの造形的な特徴をとらえ、自分のイメージをもつ。

● 用具・材料

児童／懐中電灯などの光源、透明容器などの光を通すもの（ペットボトル、卵パック、プラスチックのカップの容器など）

教師／光源（懐中電灯、イルミネーションなど）、延長コード、透明容器などの光を通すもの、色セロハン、和紙（光源を包める大きめのものがあるとよい）、トレーシングペーパー、画用紙、ビー玉、網、ひも、セロハンテープ、養生テープなど

※ 光源は一人につき一つ以上はあった方がよい。

● 場の設定

部屋は理科室、体育館舞台など、暗室にできる場所を選ぶ。電源の位置を確認しておく。展開によっては吊りたいという子どもも出てくるのが予想されるので、ひもの用意とひものを掛ける場所の確認もしておく。材料は種類毎に分け、選べるように置く。

● 導入のしかた

まずは、「光でどんなことができそうかな」と投げかけ、光源と材料の組み合わせをいろいろ試してみる。子どもたちの声から、光を出すもの、通すもの、遮るもの、色を変えるものがあることを意識できるとよい。それをもとに「光でこの部屋を変身させてみよう」と提案する。

■ 評価の観点

関／光の表し方をいろいろ試しながら、光、材料、場所とかかわることをたのしむ。

発／光や材料、場所の特徴などから活動を思いつく。

創／光や材料の組み合わせを、場所の特徴や自分の思いに合わせて工夫する。

鑑／自分や友だちの活動のよさやおもしろさに気づき、認め合う。

安全指導

暗い中での活動になるので、刃物類はできるだけ使わない。ガラスなどを使う場合は高いところや倒れやすいところに置かないなど、割れないように注意する。光源によっては熱くなるものもあるので、直接材料や体に触れないようにするか、使用を避けるなど配慮する。

後片づけ

材料は種類毎に分別する。プラスチックは資源ゴミとしてリサイクルできる。

2回に渡って授業を行う場合は、形を維持できるものは保管できる場所に置いておき、残りの材料は分別してとっておく。

◎題材の発展

障子など和紙を生かす、ガラスや鏡を利用する、吊るすなど、その場所にあるものをうまく生かせると活動が広がりのあるものになる。

スポットライトなどの強い光源を用意してスクリーンに投影する活動にしてもよい。見る側と光源の間にスクリーンと投影するものを置くと、その距離によって見え方が違うので、その変化を工夫してたのしむことができる。影絵劇のように動きのある活動に発展することもある。



■ 授業の流れ・展開例

導入 15～45分／提案1＝「光でどんなことができそうかな。いろいろ試してみよう」



暗闇に光を灯すだけでもはじめはわくわくし、興奮する。その時間も大事にしたい。

材料がたくさん並んでいると、光源に色セロハンなどをつけたり、透明容器にかざしたり、和紙などで光を包んだり、まずはいろいろな材料を手にして試し始める。

そこで子どもたちが見つけていることに注目して、次の展開に生かせるようにする。

「和紙を通すと柔らかい光になるね」「色をつけたいな」

展開 60～120分／提案2＝「光でこの部屋を変身させてみよう」



「この色がきれい」「おもしろい形の影ができた」と光を通すもの、色を変えるもの、遮るものを組み合わせ、どう見えるかを試しながらつくっていく姿が見られる。

友だちと見つめたことを見合ったり、アイディアを共有したりと自然にかかわりも生まれてくる。

子どもたちがどんなことを試しているか、どんなことを発見しているか、行動や発言からとらえるようにする。暗いので難しい場合もあるが、デジタルカメラで撮影して記録するとよい。



吊るしたり、壁に掛けたり、壁や天井に投影したりと周囲の環境に動かかける展開が出てくる。

「棚にもつけよう」「隅に集めて置きたいな」「上から吊りたい」

水や色水を用いたり、鏡などの光を反射するものを利用したりと、光の見え方をさらに工夫する場合もある。

「鏡みたいところに置いたら反射して明るいね」「水で光がゆらゆらするよ」

場の特徴を子どもたちがどうとらえて生かしているのかつかみたい。

振り返り 15分／提案3＝「どんな変身が見られるかな」



一度部屋を明るくして使わないものを片づけるなど安全を確保してから、暗転してみんなで鑑賞する時間をもつ。活動中は自分の周辺に集中していて全体が見えにくいことがあるので、一度全体が見える場所から引いてみる時間をもつと、子どもたちの見え方が変わり、新しい発見をつぶやく場合もある。また、友だちの活動を互いに鑑賞する時間としてもよい。

子どもたちの反応やつぶやきをとらえたい。

（河野 路）

小学校図画工作科教授用資料 AD

心 からだ 躍る

造形遊び指導のポイント実践事例集 2014

平成 26 年 3 月

監修 藤澤英昭

編著 日本造形教育研究会 東京支部 造形遊び研究部会

発行 **開隆堂出版株式会社**

〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1

☎ 03-5684-6117（編集）／03-5684-6121（営業）

<http://www.kairyudo.co.jp>